

一般常識動画④

バブル崩壊とグローバル化 1989-2004

関連サイト

東京サミット・プラザ合意他

<http://www.youtube.com/watch?v=N2wA0pKDnCs>

バブル景気

<http://www.youtube.com/watch?v=7wNmJE6G0Do&feature=related>

緒方貞子

<http://www.youtube.com/watch?v=aockbm9FaZs>

地雷除去

<http://www.youtube.com/watch?v=cmROQWMUUEs>

ネルソン・マンデラ

<http://www.youtube.com/watch?v=S06TyTRb5U4>

旧ユーゴ紛争から 10 年

<http://www.youtube.com/watch?v=i0QfJNQ88MO&feature=relmfu>

香港返還から 10 年

<http://www.youtube.com/watch?v=CxMgEK5oRrI>

アジア通貨危機から 10 年

<http://www.youtube.com/watch?v=kDQNCxk6478>

地球サミット

http://cgi4.nhk.or.jp/eeco-channel/jp/movie/play.cgi?did=D0013770650_00000

生物多様性

<https://www.youtube.com/watch?v=A98iXyhT4co>

介護保険

https://www.youtube.com/watch?v=yOqTEuio_Iw

BRIC s

<http://www.youtube.com/watch?v=4Ad4LaxzrsY>

イラク戦争

<http://www.youtube.com/watch?v=XZ7nIGIurwM>

高田の独り言

1989 年という年・・・私が 17 歳のころ

これまで私にとって最も大きな意味を持った年は 1989 年でした。当時 17 歳から 18 歳になろうとしていましたが、世界の若者が周囲を取り巻く情勢を大きく変えようとした時代でした。

その年の正月は、昭和天皇が病気のため、正月のお笑い番組も自粛気味でした。ニュースは毎日「本日天皇陛下が下血なさいました。」というものから始まり、なにやら国民全体が楽しんではいられないような無言の圧力を感じました。東日本大震災後、毎日地震情報が流れて花見ができなかった 2011 年の東京と似ています。その天皇が亡くなったのがこの年の 1 月 7 日でした。テレビ番組はどれをみても暗いムードで、唯一 NHK 教育が空気も読まずに「中国語講座」などをやっていたので、私はやたら外国語講座ばかり見ていました。そして翌日から「平成」が始まったのです。

そしてゴールデンウィーク前から、北京で学生たちが民主化を要求するデモに関するニュースが毎日報道されました。ブラウン管に映る北京の町では、私より 2, 3 歳年上の学生たちが民主化を要求していました。それがエスカレートし、ハンガーストライキをしたりプロテストソングを歌ったりしていました。けなげなまでに毅然たる態度で共産党に民主化を要求する中国の学生たちに感銘し、私も同じ年頃の彼らに合流したい

気に駆られました。西側メディアばかりを見ていた私は、共産党＝悪者、学生＝正義という単純な構図で見ていたのです。

そのうちペレストロイカで改革を行ったゴルバチョフが北京を訪れたので、党が軟化するかとおもいきや、戒厳令をしくではありませんか。そして学生たちは天安門前に「民主の女神」という白い塑像をたてました。その姿は西側の私にとって中国の若者の崇高な理想の発露と移りました。そして6月4日の夜、無差別発砲が起こったのです。一カ月以上も毎日北京の動きを手に汗握りつつテレビで見えていましたが、その日の光景は忘れられません。白いシャツに赤い血をにじませて倒れる若者たちや、縦断の中逃げまどう人たち。そしてなによりも解放軍の戦車に向かって独り立ち向かい、戦車の行く手を阻む白シャツの男。出雲の農村で毎日のうのうとテレビを見て興奮しているだけの自分がもどかしく、いてもたってもいられませんでした。2008年に中国人として初めて芥川賞を受賞した楊逸の「時が滲む朝」は正にこの天安門事件とその後の中国の若者がテーマとなっており、2009年の試験に出ました。

秋にはベルリンの壁が東西ドイツの若者の力で崩され、年末にはマルタ会談で冷戦が終結しました。天安門事件もそうでしたが、地球の若者が体制を変革しようと頑張っているのに、なにもできない自分がもどかしく、しかし貿易黒字や土地の値上がりのため、株価が史上最高値の四万円近くにまで上がるあのご時世、政府に対して全く何の不満もない天下太平の日本にいる自分自身がいやになるほどでした。私にとっての89年という年はこのような年でした。

また、これに先立つ3年前、中三のときから私はNHKラジオ講座で中国語を勉強し始めました。当時はただ20個ぐらい単語を知っているだけでしたが、テレビニュースでながれる北京の若者の中国語を聞きながら、知っている単語が聞き取れるとそれだけでうれしく、中国語学習のモチベーションも上がりました。そして特にこの戦車に立ち向かう男の姿に私は中国人の良心を見、本格的に中国語の道を歩もうと決心したのです。その後、サンフランシスコのチャイナタウンの公園で、民主の女神のレプリカを偶然見つけたときには昔の仲間に出会ったかのようにうれしく、また、天安門広場に行くたびにあの日の光景がフラッシュバックし、自分の中国語学習はここから本格的にはじまったのだと実感したものです。



↑サンフランシスコ、民主の女神

バブル景気の思い出

71年生まれの私が中学三年生のころ、バブル景気が始まったようです。「ようです」という表現は、社会のことに無関心だった当時、それほど鮮明な記憶がなかったからです。また、地価の上昇は都市を中心として話題になったことで、出雲の農村ではほとんど関係なかったこ

ともあるでしょう。ただ、高校時代を通じて日本経済の世界におけるパフォーマンスがさまざま、アメリカの労働者がトヨタの自動車をハンマーでぶち壊していることが「負け犬の遠吠え」に思えたことは今も覚えています。

そのような中、私が高校一年のとき、竹下登が総理大臣になったことは、鮮明に覚えています。彼は私が住んでいた町の隣村の出身で、地元の学校では全校生徒を体育館に集めて「タケスタノポーシェンシェー(竹下登先生)バンザーイ！」とやらされたとのこと。その後、島根県のいたるところに農道が完備され、こぎれいな町立・村立の建物が建ち並びました。ということは地元の土建業を始め、関連会社にバブルが起こったということの意味します。当時酒類の卸問屋をしていた父もおこぼれをあずかったのか、毎日朝早くから夜遅くまでトラックに酒を積んで走り回っていました。

90年に大阪の大学に入学し、都市の景気よさに触れ、バブル景気がなんなのかを実感しました。学生時代は私も心齋橋や三条のクラブに出入りしたのですが、関西でもマハラジャ等に入ると、ワンレン・ボディコンのお姉さんたちが羽団扇をひらひらさせながらお立ち台で踊っていたものです。バブル真ただ中ではあっても、「ああ、これがバブルなんだなあ」とその熱気を楽しみながらも耳元には「祇園精舎の鐘」の音が聞こえてきたのも覚えています。

また、飲食店という飲食店には「バイト募集」の張り紙が見られ、就職活動も超売り手市場でした。大1の夏に先輩が「今夜寿司をおごってやるからスーツでこい。」といわれて、行ってみたら先輩が内定をとった某自動車メーカー社の人事課の方がいて、1年生の私に寿司

をおごって下さり、「うちの会社では中国の工場に送る人材が欲しいねん。中国語も生かせるし、考えといて。」といわれ、名刺をいただきました。別の先輩の紹介でステーキもいただいたりしました。そのころの私は就職活動とは寿司やステーキを食べることだと思っていました。

それが2年生に入ると、新聞の一面にバブル崩壊の文字が。その時から情勢は一変します。先輩が私に声をかけてくれる時に行く場所はファミレスにかわり、しかも割り勘です。その金もないのでバイトをしようとしても、あれだけあった求人紙もなくなり、マハラジャも閉店していました。

3年生になると親からの仕送りが少なくなった学生も増え、バスルームのない私のおんぼろアパートでは雨の日にパンツ一枚でタオルとせっけんをもって雨どいの下に立って、雨水でシャワーするのが流行りました。さすがに一人するのは恥ずかしいので、貧乏仲間をさそってやっていました。ビールは高いので、アルコール度数が高い割には安いテキーラやウォッカを飲むようになりました。また、就職活動はまじめにやらねばならないという当たり前の現実が待っていました。

とはいえ、今と比べれば街にはまだまだ活気があり、根拠なくすぐに回復すると思っていました。94年3月、私はスポーツバッグ一つに辞典や文法書を詰め込んで神戸港から出港し、鑑真号で大陸を目指しました。その時も1年ぐらい留学して帰国すれば景気は回復しているだろうともくろんでいました。まさかその10ヶ月後に関西全体が大地震の被害を受け、神戸港がしばらく使用不可能になるとは思ってもいませんでした。そ

してそれ以上に日本の景気が20年間も低迷するなどとは思ってもみませんでした。バブルとはそこにいる人の感覚をおかしくする、不思議なものだと気付いたのはかなり後になってからのことでした。

90年半ばの東アジア放浪記

94年から96年まで、私は中国・吉林省延辺に住んでいました。その間、日本では阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件などが相次いで起こりましたが、中朝ロシア国境の町に住んでいた私はNHKの短波ラジオで様子を想像するしかありませんでした。そしてその前後、急速に世界がグローバル化しつつあり、「南巡講話」以降の中国ブームにわく北京や上海、広東などといった都市部では外資系企業が雪崩のようにはいってきました。広東や福建、上海から東北にやってきた学生にきくと、あちらのほうは外資系企業ラッシュでものすごい景気の良さだといいます。そこで周りの朝鮮族の学生たちも相次いで沿海地方を目指しました。そこには韓国語を話す人材を求める韓国企業が大挙してきていたからです。

そんな中、96年の帰国前後に流行っていた歌が「私の1997」という歌で、瀋陽の女の子が北京、南方を経て憧れの香港を歌いつづったものでした。政治的なものというよりも香港のヤオハンでショッピングがしたい、というようなかなりミーハーな内容を、あこがれをこめて歌っていました。

97年に香港が中国に「返還」されたとき、私は沖縄で日本語学校の講師兼通訳兼雑用係をしていました。学生たちは7割ぐらいが福建省の出身でしたが、ある学生が、「中国人にとって香港返還は

歴史的瞬間であるからこの目でみたい。」と言って一時帰国したのを覚えています。そして同じ年のアジア金融危機により、学費が払えなくなったタイと韓国の学生が帰国しました。

翌98年に韓国に行ったところ、町中に太極旗がはためいていました。また、釜山の町でIMFの指示により巨額の負債を負ったという自称「元社長」に、「お金を忘れたからご飯をおごってください。」と言われ、「IMF定食」(?)なる定食をおごってあげました。「IMF定食って何ですか？」と聞くと、真偽はともかく「IMF時代を元気に乗り切ろうという気合を入れて食べる定食だ。」と、言われました。そのほか、IMFに融資を受けるとともに、韓国人が韓国経済を立て直すのではなく、IMFの指示通りにしなければならないという悔しさのようなものを町のいたるところで感じました。IMF定食や、ナショナリズムのシンボルである国旗が、それを物語っているかのようでした。

二十代半ばの元気なころ、色々な人とかかわりが後になって歴史的な事件に起因するということを再認識しました。